

風邪のウイルスでがん細胞を破壊する技術を開発し、動物実験で効果も確認した。会長で兵庫医科大学教授でもある後藤章暢(あ)が研究を指揮。かつて医療機器開発のベンチャー企業を率いた社長の阪井寛史(あ)が、事業計画の策定や資金調達のアイデアを練る。二人三脚で、がん治療技術の実用化を目指す。

会社設立前の一九九四年、後藤は風邪を引き起す「アデノウイルス」の研究を開始。このウイルスにがんを破壊する機能があることを大学の仲間らに見つけた。「これを体内のがん細胞にぶつけば、がんを治療できる」。

しかし、過去にアデノウイルスによる風邪にかかった人はウイルスへの免疫を持つ。ウイルスを注入しても、体内のがんには届かない。アデノウイルスを安全に患部に送り届ける「運び屋(ベクター)細胞」が必要だった。

試行錯誤の末、見つけた運び屋は肺がん細胞。ここにアデノウイルスを組み込めば、

大学発のベンチャーとして設立され、資本金一億3960万円、従業員10人。2006年9月期の売上高は約2500万円、次期は約1億円を見込む。神戸ポートアイランド2期に本社と細胞培養センターを置く。

がんの治療技術

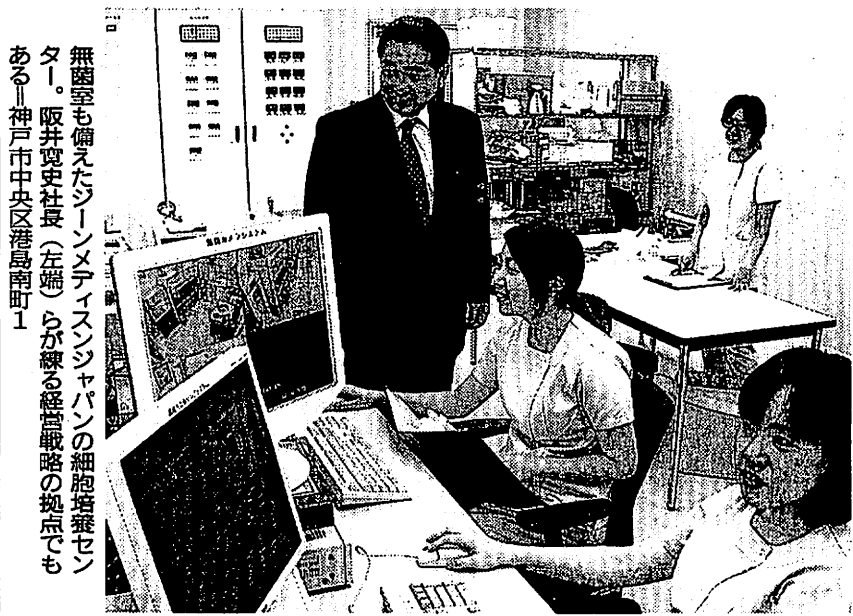
高い確率で患部に届けられる。マウスを使った実験では、がん細胞が消滅。卵巣がんや前立腺がん、胃がんに効果が期待できそうだった。技術を事業化するため二〇〇三年、シーンメディスンジャパンを設立。まずは無菌室を備えた細胞培養センター(CPC)の建設に着手した。

ウイルスや細胞を扱う現場にとって雑菌は大きな脅威となる。雑菌が混入した細胞を治療用に使ってしまうと、取り返しのつかない副作用を引き起こす可能性がある。外部にある施設を借りようにも、

求めていた水準のものは国内にない。設備の整った米国に

研究委託する選択肢もあったが、せっかくの技術が流出する恐れがあった。

CPCは昨年六月に完成。事業が正念場を迎えたことを



無菌室も備えたシーンメディスンジャパンの細胞培養センター。阪井寛史社長(左端)らが語る経営戦略の拠点でもある神戸市中央区港島南町一

施設活用し資金調達

受け、後藤は旧知の阪井を社長に迎えた。その阪井が考えたのが、数億円を投じたCPCを収益源としても生かすこと。外部の研究を請け負い、CPCで処理すれば、事業の柱にもなる。

CPCを拠点に進む、がん治療の技術開発。阪井が発案した研究委託ビジネスも、順調に海り出した。「われわれの医療技術が国から承認され、使えるようになるまでには、長い時間と多額の資金がいる」と阪井。「CPCで稼いだ資金を開発に回すビジネスモデルで、成果を世に出したい」

敬称略
(松井 元)

ものづくり高度化支援融資は鍛造、鋳造、めっきなど十七分野を対象に同公庫が六月から扱い始めた。一社につき最大七億二千万円を融資する。

(大久保 育)

三、業種別では、建設

の四六・〇だった。景気判断の分かれ目となる五〇を下回ったが、八カ月ぶりに下げ止まった。規模別では、中小企業が前月比〇・四割上昇し四五・七。大企業は同一・四割悪化し四七・

「強み」を磨け

シーンメディスンジャパン(神戸市中央区)

世界的「需要」が高まる川崎造船の「ING」運搬船



と文へ、労働組合が大目める賃上げには慎重に臨むべきだとの考えを示した。

御手洗会長は「企業が国際競争に勝つためにも労働生産性が重要な要因になっている。一律にベラスアップするという時代は過ぎた」として、同じした。

賃金制度については「年功序列賃金体系を壊し、役割給にすることが企業の生産性向上に結び付く」として、職務や能力に応じた仕組みに改めべきだとの考えを強調した。

調整を支援する「ものづくり高度化支援融資」の一環として、金型メーカーの豊産業(神戸市西区)に四千万円を融資したと発表した。兵庫県の企業に対する同融資の実行は初めて。

が均一になるように調整するシステムの開発に取り組んでいる。金型の部位によって温度にはらつきが生じると、素材の加工精度に影響するため、温度を均一化することによって素早く精密な

は初めて。融資で

の四六・〇だった。景気判断の分かれ目となる五〇を下回ったが、八カ月ぶりに下げ止まった。規模別では、中小企業が前月比〇・四割上昇し四五・七。大企業は同一・四割悪化し四七・